

平成25年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成25年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

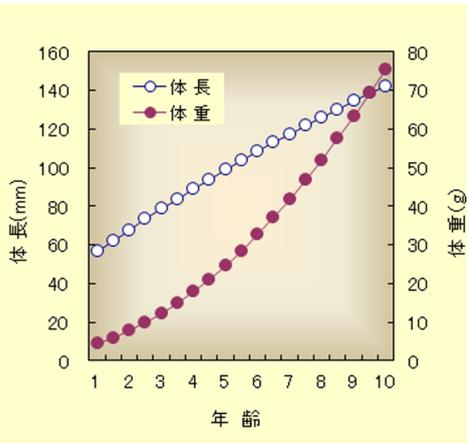
系群名 太平洋北部

担当水研 東北区水産研究所



生物学的特性

寿命: 20歳程度
成熟開始年齢: 雄5歳(100%)、雌10歳(11%)、11歳(35%)、12歳(69%)
産卵期・産卵場: 1~4月、分布域全域
索餌期・索餌場: 周年、水深350~1,300mの深海域
食性: エビ類、オキアミ類、クモヒトデ類、端脚類、多毛類、魚類
捕食者: マダラ、アブラガレイ



漁業の特徴

太平洋北部では、キチジは主に沖合底びき網漁業(沖底)で漁獲されるほか、小型底びき網漁業、底延縄、底刺網でも漁獲される。1990年代以降、沖底船は9~12月にスルメイカを狙って操業することが多く、スルメイカより深場に生息するキチジに対する漁獲圧は弱まっていた。しかし、震災後の2011年以降、加工場の減少やマダラの水揚げ制限等により、鮮魚として出荷できるキチジ狙いの操業が増加している可能性がある。

漁獲の動向

全漁業種類による漁獲量は1975~1997年にかけて減少した。沖底の漁獲量も1970年代には2,000トン前後と多かったが、1997年には過去最低の229トンとなった。その後、沖底の漁獲量は増加し、2003年以降は500トン前後で推移している。東日本大震災の影響で2011年の漁獲量は減少したが、2012年には全漁業種合計で534トン、沖底で524トン(暫定値)と震災前の水準まで回復した。



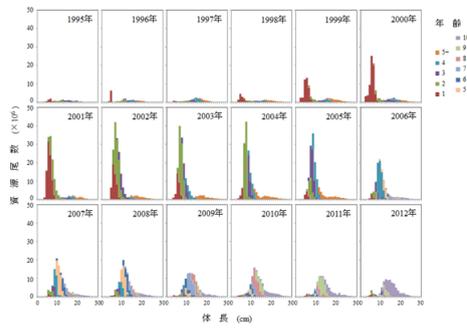
資源評価法

秋季にトロール網による底魚類資源量調査を実施し(水深150~900m、計101地点)、面積-密度法により資源量を推定した。調査海域は青森~茨城県沖で、太平洋北部のキチジの分布範囲をカバーしている。本調査で用いたトロール網の身網による採集効率(網の前にいた魚が網に入る比率を示す係数)にLogistic式を仮定し、この値を用いて資源量の計算を行った。

資源状態

2011年以降のCPUEは急激に増加したが、東日本大震災の影響により福島県沖で操業できないなど、操業実態が変化していると考えられる。キチジのような寿命が長い種では、急激な資源の増加は考えにくい。そのため、2011年以降のCPUEは資源動向を反映していない可能性が高いと考えられる。そのため、資源量推定値の推移から資源状態を判断したところ、資源は中位水準にあると判断され、資源量推定値が過去5年では横ばい傾向にあることから、資源の動向は横ばい傾向と判断される。





トローリング調査の面積-密度法 (Logistic式による採集効率を採用) から得られた体長組成の推移を示す。

管理方策

2000年代の資源量には増加傾向が認められるが、これは1999～2002年級群の加入量が高いRPSにより増加し、この豊度の高い年級群が成長したことによる。キチジの資源は中位水準まで回復したと判断されるが、近年、資源量の増加は頭打ちとなっている。加入の少ない年が続いており、2005年以降の資源尾数には減少傾向が認められる。今後の資源量は減少傾向に転じる可能性が高いことから、漁獲を抑えることで親魚量の増加を図ることを資源管理目標とした。キチジは成長が遅く、成熟年齢が高齢であることを考慮して、基本規則1-3)-(2)に基づき管理基準値にF40%SPRを採用し、この時の漁獲量をABClimitとした。

| | 2014年漁獲量 | 管理基準 | F値 | 漁獲割合 |
|-----------|----------|----------------|------|------|
| ABClimit | 380トン | 1.0F40%SPR | 0.06 | 5.4% |
| ABCtarget | 300トン | 0.8・1.0F40%SPR | 0.05 | 4.3% |

- ABCは10トン未満を四捨五入した値

資源評価のまとめ

- キチジの資源量は中位水準にまで回復したが、頭打ちとなっている(動向は横ばい)
- 2005年以降の資源尾数には減少傾向が認められる
- 加入の悪い年が続いている

管理方策のまとめ

- 漁獲を抑えることにより、当面の親魚の増加を図る
- 単価が安い小型魚の漁獲を控えれば、親魚量が増加し、その後の加入量の増加も期待できる
- 漁獲開始年齢の引き上げは、キチジの資源管理に有効な方策と考えられる

執筆者: 服部 努・伊藤正木・成松庸二・柴田泰宙

資源評価は毎年更新されます。